

孫春平「一路划拳」⁽¹⁾について

河本 史昭

1. はじめに

筆者はかつて遼寧省出身の作家、孫春平の作品、「二叔二叔你是誰？」⁽²⁾を読む機会があった。この作品は中国の東北地方の農村の川で水死した子供を巡り、学校の対応に問題があったとして、農民が訴訟請負人の中年女性、三姨の助けを借りて村を訴える話である。官僚的な役場の幹部の対応と、それに奇想天外な策を用いて対抗する三姨の活躍、そして、時に欲に引きずられてしまう農民の正直な姿、などがユーモアを交えて描かれており、当世の中国農村の描写と相まって、大変興味深い作品であった。その結果筆者は、孫春平という作家を記憶するに至った。

このようなことが契機となり、筆者が佛教大学通信教育課程文学部中国学科の卒業論文を作成するにあたり、かつて目を通したことのある、孫春平の作品をテーマとすることとした。その作品が「一路划拳」である。

この作品も「二叔二叔你是誰？」と同様中国の東北地方を舞台にした作品で、「三年続きの自然災害」の最中の1960年から1990年代末頃までと思われる時代を、時代や社会に抗しながら自らの才覚で生き抜いていった黄建国と、彼と正反対の存在でこの物語の語り手でもある「私」の友情の物語である。

この作品の作者、孫春平⁽³⁾は1950年、遼寧省の錦州市に鉄道職員の息子として生まれ、彼自身も下郷から町に帰った後、一時期鉄道関係の現場作業に従事している。妻も鉄道関係の人間

である。そういう関係から、30代になってから本格的に創作活動に入った彼の作品には、当初「鉄路小説」と呼ばれる、鉄道関係に材を取った作品が多くみられた。

本作品も黄建国と「私」はともに鉄道関係者の子弟という設定であり、また、作品の冒頭に「私」の鉄道の無賃乗車に対する思いの披瀝があつたり、黄建国の歩む道と時代の流れが交差するすべてのエピソードに、鉄道が関係したりしている点など、一見作者が得意な「鉄路小説」を思わせる。しかし、彼自身は、この作品について以下のように語っている。

比如前些年我没少写铁路生活，最近也写了一篇涉及铁路生活的小说，叫《一路划拳》。朋友们比较一下就会发现，《一路划拳》与以前的作品有很大区别，虽然也写铁路，但把铁路放在更广阔的背景上，一些与铁路有关的情节与细节只是道具，作品便有了一种对人生、对社会更为深入的思考。⁽⁴⁾

すなわち、「一路划拳」は、一見作者が従来発表してきた鉄路小説を思わせるかのようなものであるが、実際には鉄道に関するストーリーやディテールはいずれも道具にしかすぎず、この作品は人生や社会に関して深く掘り下げて考えさせるものであるとしている。

確かに、本作品は、すべてのエピソードが鉄道に関連しており、登場人物も鉄道関係者であり、いかにも鉄道が舞台の、鉄道小説を思わせる。しかし実際には、中国の時代と社会の変遷と、それら変遷する時代と社会を、器用そうに見えてその実、不器用に渡って行った主人公、黄建国の姿と、それを見つめる、彼の少年期からの友人である「私」の思いを描くことにより、読者に、「一種対人生、対社会更為深入的思考」を問いかけているのである。

本稿は、本作品の主人公たる黄建国と、彼に同伴する「私」を見ていくことにより、彼らが時代や社会の変遷の中で、何を考えたのか、どこに進もうとしていたのか、作者の意図は何であったかを考察する。

2. 作者について⁽³⁾

本稿の予備知識として、本作品の作者、孫春平について紹介する。

彼は前述のように、1950年遼寧省の錦州市に鉄道職員の息子として生まれた。父親をはじめ、親族の多くが鉄道関係者で、通った学校も鉄道関係者の子弟用の学校、友人も鉄道関係者の子弟であった。1968年下郷の後、1971年に町に帰り、鉄道関係の工員、倉庫管理、共青团の幹部及び党委員会の宣伝部の幹部を経験し、その間に鉄道従業員の妻を得た。

彼は20代半ばから小説を書き始めたが本格的な創作は30代になってからで、初期は自分がよく知っている鉄道関係の作品を書いていた。1984年錦州市文連に職場が変わり、雑誌の編集長も務めた。1998年錦州市文聯主席、遼寧省作家協会副主席を務め、現在顧問。「遼寧省中青年德芸双聲芸術家」の称号を得ている。全国少数民族「駿馬」賞、東北文学賞、遼寧文学賞、

「上海文学」賞などを受賞、現在も現役で創作活動が続けている。

彼によると、彼の創作の歴史の中で、2回大きな出来事があったという。それは45歳の時と55歳の時に、それぞれ組織（錦州市文連および遼寧省作家協会）に「基層掛職」、即ち、第一線の現場への出向を願い出て、実際にそれぞれ数年間、現場での業務（地方の党委員会の副書記）に当たったことである。

彼はこれらの経験を経て自分の作品の対象の範囲が、従来の鉄道関係はもとより、工場関係、農村関係、学校関係さらには

公安事件関係にまで広がった、という。特に、55歳からの「基層掛職」に際しては、彼は自ら志願して、「県級区域」、即ち、中国においては「市」よりもさらに下級の「県」での職場で勤務したことにより、以下のような社会を経験できたのは、創作活動の面からも、大きな収穫であったと述べている。⁽⁴⁾

一个县，就是一个小社会，是各种生活、各层次生活的一个集中缩影，工农兵学商，五脏俱全，包罗万象，而且脚踏实地，直接接地气，与上与下都能衔接得上、联系得起来。

そして彼は、小説を書く上では生活体験が極めて重要であるとして、次のように述べている。

我觉得作家，尤其是写小说的，生活经验对他非常重要。有了生活经验之后，就考验你作家的文学想象能力。有了生活经验又有了想象能力，这两个翅膀同时扑展起来，作家创作的这只鸟儿才能展翅飞翔。缺少生活经验，就好像失去了一个翅膀，鸟是无法飞起来的。⁽⁴⁾

即ち、生活経験と想像力の二つの翼があつてこそ、飛翔できるのだという考えである。彼は、この生活体験の基礎の上に作品は成立するという考えのもと、長年にわたり作品を発表してきている。

彼のショートショート作品集⁽⁵⁾には、彼の主要作品の創作年表が収録されているが、これによると、彼は1980年代後半から途切れることなく、短・中編小説を発表し続けている。特に2006年以降の、2度目の「掛職」を経験してからは、短・中編小説及びそれらの作品集、長編小説、TVドラマ原作が目白押しに並んでいる。これら及び2010年以降に発表された作品集をそれぞ

れ表の形で以下にまとめた。（表-1、表-2）

これらを見ても、彼が「掛職」での経験を創作の糧にしたであろうことが判る。

本作品、「一路划拳」は2008年の作品であり、彼の2回目の「掛職」の真最中の作品である。前述したような、彼のモットーとするところの生活体験と想像力の二つの翼によって、飛翔した作品となったかどうかを以降の章で確認していく。

表-1 孫春平 2006年以降の年代別ジャンル別作品発表リスト

	長編小説	中短編小説集	中編小説	短編小説	TVドラマ
2006	县委书记	怕羞的木头	预报今年是暖冬	彭真莲的第二职业 1968年的列车	
2007			守口如瓶	派我一辆吉普车	喜庆农家 爱情二十年
2008			一路划拳 水枪 追凶709	换个地方去睡觉 皇妃庵的香火	
2009		米字幅	一树酸梨惊风雨 她家人 非典型正当防卫 鸟人 螳螂	1971年的小道消息 据说今年有海啸 (二题) 拆了墙是一家 蛇道鼠道人行道	金色农家
2010		公务员内参	春秋平分 针鼻孔・城门风 二舅二舅你是谁		

表-2 2010年以降の孫春平作品集（インターネット検索による判明分）

『同一首歌』 吉林出版集团有限责任公司 2010年5月（ショートショート集）
『中国小小说 金麻雀获奖作家文丛 孙春平卷 讲究』世界图书出版广东有限公司 2011年6月
『老牛车上的钢琴(超人气现代名家小小说丛书)』华夏出版社 2012年1月（アンソロジー）

『百年百部微型小说经典 老人与狐』四川文艺出版社 2012年2月 (ショートショート集)
『谁饭能摩挲爱情』大连出版社 2015年11月 (中短編小説集)
『一路划拳』中国言实出版社2016年1月 (中編小説集)
『沽婚』山东文艺出版社 2016年3月 (中編小説集)

3 本作品の梗概

1960年、私が10歳から物語は始まる。私は母親の言いつけで、家で飼っている鶏が生んだ卵を、ゆで卵にして駅で密かに売っていた。それを同級生の黄建国が見て、もっとうまいやり方を教えてやると言う。その方法は鉄道員の子弟であることを利用して列車に無賃乗車し、その列車で卵を売りさばく方法であった。私は彼に従った。

私は黄建国に連れられて、地元から離れた町の市に行き、そこで建国の大人顔負けの交渉ぶりを目にする。次の日私と建国は、彼が家からくすねてきた酒を飲みながら大人の真似をして拳を打ち、義兄弟の契りを結ぶ。本作品のタイトル、「一路划拳」はこの最初のエピソードに由来する。その後、私は彼のやり方を参考に、知恵を働かせて卵売りの商売を拡大し、小金を貯めた。

ある夜、私は、叔父の緊急手術の費用の件で、父母が口論しているのを聞いた。翌朝、私は手元の数十元の金を母に提供し、卵売りの一部始終を白状する。その金で叔父は命拾いをする。数日後、父は私に感謝するとともに、卵売りの行為は投機的な取引で、放火や人殺しと同じ大罪なので二度とやってはならないと諭す。

その後、私は卵売りこそしなかったが、黄建国に倣って相変わらず無賃乗車であちこち駆け回り、食料品を家族のために安く調達した。そして文化大革命が始まる。私たちは紅衛兵となっ

て、全国各地を大「視察」旅行をした。私たちは農村に知識青年として下郷する。挿隊した生産隊から帰省したり、生産隊に戻ったりは、もちろん無賃乗車だ。だが、一度私たちは大規模な無賃乗車の摘発に遭遇した。しかし建国の大胆な行動で事なきを得、私は改めて黄建国の知恵と胆力、行動力に舌を巻く。

その後、黄建国は帰省先から再び生産隊に戻る列車の中で、一緒になった地元の女の子（于金霞）と、ひょんなことから過ちを犯してしまう。その結果、于金霞は妊娠し、建国は彼女と結婚せざるを得なくなる。彼は知識青年の拠点（青年点）で結婚式を挙げ、女の子が出来る。やがて私は他の仲間と一緒に町に帰っていくが、建国は農村の娘と結婚し、おまけに子供まで作ったので町に帰るメンバーに選抜されることは無かった。建国は深く傷ついた。

町に帰った私は木材会社に配属され、通勤定期をもらった。それを自慢がてら、青年点をよく訪れる。黄建国は生産隊での労働ははたらかしにして、お得意の無賃乗車でのブローカー商売で金を稼いでいる。生産隊の批判大会で糾弾されて彼はしおらしく自己批判するが、その実少しも反省していない。

その後、私は努力の末新聞社に入り、取材活動で走り回る。ある時、黄建国の誘いで瀋陽に遊びに行った。その帰り、私と建国が乗った列車に、男子の乳児が捨てられていた。建国はその捨て子を養子として貰い受けた。私はそれを美談として報道し、その過程で美人の女列車長と知り合う。後にその女列車長と意気投合し、私は彼女と結婚する事になった。後日、建国に彼女を紹介すると建国は大いに驚き、酒豪のはずが少量の酒で大いに乱れた。

改革開放期に入り、黄建国はますます「事業」を発展させる。私が建国に闇ブローカー商売は止めて実業に就くよう忠告しても、彼は聞く耳を持たない。私が大連に出張したとき、建国が

若い女性を囲っているのを見た。友人として忠告すべきかどうか私は逡巡する。

ひょんなことから、私は黄建国が列車で捨て子を拾った一件は、彼の自作自演であり、赤ん坊の捨て子は、実は彼の正真正銘の息子であったことを知る。政府の「一人っ子政策」を免れるための一芝居であったのだが、何も知らされずに芝居に「共演」させられた私は、割り切れない気持ちとなった。

釈明の為やってきた黄建国と酒を飲みかわすうちに、私は気になっていた彼の大連の囲い女の件を問いただし、妻の于金霞を大事にするように忠告した。すると建国は思いがけない告白をした。彼は自分の妻と比べて、私の妻が美人で聡明であることに、大きな劣等感を抱いていたのだ。私は建国が抱いていた鬱屈した思いを初めて知り、今後の二人の友情に漠然とした不安を感じる。

その後何年間か、私と黄建国との付き合いは、捨て子騒動のわだかまりと、建国が私に対して複雑な思いを持っていることを知ってしまった戸惑いから、表面だけの淡泊なものになっていた。ある時、私は列車で偶然にも建国と同じコンパートメントに二人だけで一緒になった。彼は切符の代わりに偽造の列車査察票を持っている。二人は昔を懐かしみ、酒を酌み交わしながら拳を打った。私が建国との来し方を想い、胸を熱くしているとき、公安の大掛かりな車内検査が始まる。偶然列車に人民代表が乗車していた為である。この時、建国は持っていた査察票が偽造であることがばれ、連行される。彼は連行される前に、密かに私に荷物を託した。

取り調べの結果、黄建国は半月の労働教育に送られる。彼はここでも彼はうまく立ち回り、わずか数日で出所し、そのまま姿を消した。

その後、私に企業の海外視察に同行する話が来た。ところが

公安に疑いをもたれ、視察同行の話は消えた。どうやら黄建国が麻薬に手を染めており、公安は私にも疑いを持ったようだ。結局、私は単なる幼馴染ということで疑いは晴れる。私は彼と最後に会った時に託された荷物について、公安に申告した。調べてみるとお菓子の中にヘロインが1kgも隠されていた。ヘロイン所持は50gでも死刑になるというのに。

その後も黄建国の姿は杳として知れない。彼が早く自首して刑に服し、死刑を免れるのを待つのみである。

ある時、私は家の近くの工場用の専用線路の上で、ビール瓶を抱えて拳を打っている二人の少年を見た。彼らは婦人に怒鳴られて逃げていく。まるで小さい時の私と黄建国のようだ。私は啞然としてそこに立ちすくむ。

4 「私」の目に映る黄建国、黄建国から見る「私」

本章では、時代と社会の変遷の中で、黄建国と「私」がどのように生きていったのかを、二人の間の感情や心理的移ろいとともに追い、作者が提起した問題点に迫る。

4. 1 メンターとしての黄建国、メンティーである「私」

時代は1960年で、「3年続きの自然災害」の真ただ中、国民全体が飢餓にあえいでいた時代である。母親は家で飼う鶏が産んだ卵をゆで卵にし、「私」にそれを駅で売ってくるように命じる。「私」は止む無くそれに従う。

「私」はゆで卵を手に、警察に見つからないように辺りをキョロキョロしながら必死にゆで卵を買ってくれそうな人物を探す。「私」はまだ子供ではあるが、闇でのゆで卵売りが、警察に見つかれば厄介なことになるというのは承知している。緊張の連続ではあったが、手持ちのゆで卵を全部買おうという金持ちの客を見つけ、「私」は何とか母親のノルマを果たし、ほっ

とする。そこに、どこで見ていたのか、黄建国が、にやにや笑いながら登場する。「私」にとって、建国はこの時点では単なる級友の一人にすぎない。それも体は大きいが、勉強はあまり出来ない、そしてテストのときはカンニングペーパーをよこせとせがむ存在だ。その彼がにやにや笑いながら、やるじゃないか、とからかうように言う。「私」が顔をほてらせながら、母親の言いつけでやっていただけだと言い訳すると、建国は俺がもっと上手いやり方を教えてやるよと言う。その方法は、思いもしなかった方法で、俺たちは二人とも鉄道従業員の子弟ではないか、鉄道をうまく利用して列車にただ乗りし、列車の中で卵を売ればいいのか、という方法だ。「私」はたちまち、この提案に魅了されてしまう。

この「私」と黄建国の、物語での最初の遭遇で、二人の関係や考え方が読者に示される。即ち、「私」は駅で隠れてゆで卵を売るのは大っぴらには出来ない、恥ずべき行為であると感じている、知り合いに知られるなどもっての外だ。ところが、同級生とはいえ、あまり親しくもなく、少し軽んじてさえいる黄建国に見つかり、冷やかされてしまい、この上もなく恥ずかしく思う。一方、建国は違う。彼は駅で卵を売るのは、恥ずかしいことでも何でもない、「中国全土で1500万～4000万の餓死者が出たと推計され」⁽⁶⁾るようなこの時代、生き延びるためには当然の行為である、子供ながら既に実感している。

そのような彼が、不器用な所作でゆで卵を売っている、優等生の級友である「私」を見て、援助の手を差し伸べようという気になった。その主たる理由は、建国が純粋に友人を手助けしたいと思ったからである。彼は後に、郷里の鉄道分局で不足している燃料油の入手や、「私」が新聞社の正社員になる時に指示された、広告取りを援助したりしている。即ち、建国は鉄道一家の友人を大切にしたい気持ちの持ち主であり、日頃学校で世

話になっている級友の覚束ない姿を目にして、言わばメンターとして「私」を教育してやろうという気になったのだ。

しかし黄建国が「私」に好意的であった理由はそれだけではなかろう。もう一つの理由は、彼が「私」に対して、一種の優越感も感じたことにもあると筆者は考える。彼は学校の勉強では「私」に及ばない劣等生であるが、現実の世間での適応力にはるかに勝っており、社会全体が飢餓にあえぐ困難な状況にあっては、現実の社会を生き抜く力が最も重要であることも既に知っている。駅で見かけた、おどおどしながらゆで卵を売っている優等生の「私」の姿は、建国の優越感をくすぐり、「私」にあれこれノウハウを伝授する際には、一層それを感じたであろう。即ちこのような友人思いの側面と、ある種の優越感に浸れる快感から、建国は「私」に無賃乗車の手口とヤミ商売の方法を伝授しようという気になったのだ。

一方、「私」の心の動きはかなり単純だ。最初、後ろめたいことをしている姿を、普段軽んじてさえいる同級生に見つかった。これに恥ずかしさを覚え、次にその級友が披露した、無賃乗車した列車で卵を売るというアイディアにあっけにとられ、そして魅了される。即ち、普段はあまり眼中になかった黄建国の、教室では見られない大人びた態度と、彼の奇抜かつ魅力的な提案に心を奪われてしまう。ここに「私」と建国の関係が見えてくる。即ち、「私」にとって建国はメンターであり、そして「私」はメンティーである。

「私」が黄建国と一緒に初めて無賃乗車をして、列車内でゆで卵を売りに行った日、建国は「私」に、鮮やかな無賃乗車の手口を披露し、さらに市の立っている町では、大人顔負けの交渉術で、引き割りトウモロコシを格安で手に入れる姿を見せつけた。

別看他平时对什么是乘数除数商啊积的整不明，可在这路事上，他的精明若打100分，我就连及格都难啊！（p268）

学校では加減乗除も怪しい黄建国が、現実の世の中では「私」が及びもつかない素晴らしい才能を持っていることに「私」は驚く。そして初めての列車ただ乗りの翌日、二人は建国がわざと売らずに残しておいたゆで卵を食べ、彼が家からくすねてきた酒を飲む。さらに建国は父親の様子を見て覚えた拳遊びを「私」に教えてやろうという。

咱哥俩都学会了，往后就有伴儿了，有福同享，有难同当。（p269）

二人がうまくできるようになればこれからは友達だ、苦楽を共にするのだ、と。二人は酒を飲み、拳を打ち、義兄弟の契りを結ぶ。ここに、黄建国＝メンター、「私」＝メンティーという関係が成立したのである。

その後、「私」はノウハウを吸収して独り立ちし、何かと口実を設けて黄建国とは別行動をとるようになるが、彼はそれについて文句をつけたりはしない。これは独立しようとするメンティーを、温かく見守るメンターの態度であるといえる。

「私」は母の卵を売った金で新たに安い生卵を大量に仕入れ、それをゆで卵にし、無賃乗車の車内で更に売りさばく、という方法でもうけを増やしていく。ある日、誤って劇薬を口にした叔父さんの手術費用のことで両親がもめているのを知り、「私」は母親に今までのもうけを提供し、併せて列車内での卵売りの件を白状する。その結果、父親から、家の問題を救った感謝と共に、安い卵を仕入れ、それをゆで卵にして売るといえるのは投機行

為であるから止めるよう命令される。投機行為と聞いて、「私」は震えあがってしまい、以後、金儲けのための「投機行為」は止めてしまう。ここに、その後建国と異なる道を歩むことになる「私」の性格の一端が示される。

その後、世の中の経済状態が少し好転し、またヤミ取引に対する取り締まりも厳しくなったことから、黄建国と「私」は専ら無賃乗車で遠方まで食料の買い出しに行くようになり、二人は再び行動を共にする。

我们需要鼓劲，需要安慰，更需要彼此的支持与协助，就像势单力薄的单干户终要合成互助组，就像两根小竹棍并在一起才是可夹鱼夹肉的筷子。（p274）

黄建国と「私」の関係は、一本ずつでは用をなさない竹の棒が、二本合わさって初めて肉や魚を挟むことが出来る箸のようなものである。この段階での二人の関係は、志を同じくする同志、と言うところか。

そして文化大革命が始まる。

ところで老枪という、孫春平と同じ「錦州鉄中」（錦州市鉄路高中）^{（7）}の卒業生で、やはり鉄道一家の子弟だったブロガーが、文化大革命時の学校の様子をブログに書いている。

その記事によると、当時激しい闘争の結果、学校関係者の中にも首を吊ったり、線路に身を横たえたりして自らの命を絶った者がいたようである。

他们忍受不了屈辱，大都选择了上吊自杀还有人卧轨于自己曾经战斗过的火车轮子下……

（http://blog.sina.com.cn/s/blog_4518f8190100zvtj.html17/10/10）

当然、同世代の孫春平は、文革時のこれらの悲劇を見聞きし、経験したであろうが、少なくとも本作品中には、そのような文革期の深刻な状況、凄惨な場面は出てこない。孫春平は、この「紅衛兵」の時代のことを、本作品では以下のように「私」や黄建国、その他の級友が鉄路、全国各地を「視察」した、としてユーモアを交えて軽く触れている程度である。

突然的一夜之间，无票乘车成了普及全民震撼世界的大风景，那就是红卫兵大串连。在此期间，我和黄建国，还有班级的其他同学去过北京、上海、杭州、南昌、广州、武汉、成都、西安等等等等，凡是能通火车的省会城市差不多都被我们“视察”了一遍。
(p274)

更に時代は1968年に移り、「私」と黄建国は同じ生産隊に下郷する。ある時、町に帰省した二人が、他の知識青年たちと同様切符を持たずに列車に乗り、生産隊に戻ろうとしたとき、下車駅で軍隊を動員した大掛かりな無賃乗車摘発作戦に遭遇する。周りを兵隊たちに取り囲まれて絶体絶命の状態になった時、建国は「私」が着ていた父親のお下がりの鉄道の服を着て鉄道員を装い、知識青年たちに無賃乗車を警告する体で、その実逃げる方法をこっそり示唆する。その方法（停車している列車の下をくぐって逃げる）で、皆は何とか逃げおおせる。一方、建国は最後まで鉄道員のふりをして、疑われることなく堂々と検問を突破する。

我说：“他们没问你呀？”

黄建国说：“问我什么？就咱，正经八百的铁路工作人员，《铁道游击队》白看啦？”
(p277)

尋問されなかったのかと尋ねる「私」に対して、黄建国は日本兵の変装をして日本軍の包囲網を突破した、映画『鉄道遊撃隊』のようだったろうと自慢する。ここで「私」は改めて建国の胆力、智力に感嘆するのである。「私」はやはり建国にはかなわない、建国は永遠の兄貴分であり、師であると感じる。読者も改めて、建国の知恵と胆力に感嘆し、「私」の、彼は生まれる時代を間違えた！という感想に同意するであろう。

4. 2 黄建国の蹉跌とそれを見守るしかない「私」

これまで順調であった黄建国に思わぬ落とし穴が待っていた。町に帰省した建国が、生産隊に戻る途中、無賃乗車にまつわるトラブルに遭遇し、その過程で生産隊の近隣の農村に住む農家の娘、于金霞と過ちを犯してしまうのだ。その結果、建国は彼女を妊娠させてしまい、結婚を余儀なくされる。彼は挿隊先で結婚し子供も設けたので、現地に根を下ろしたと見なされ、町に帰れなくなる。

上山下郷の時代、知識青年がこのように下郷先で結婚し、町に帰れなくなる例は実際にあり得た。例えば、知識青年たちの報告集にも、下記のような例が報告されている。⁽⁸⁾

・・・下郷で農場にやって来た雷超は農家の娘、玉珍と知り合いになった。ある秋の夜、出先から一緒に帰る途中、二人は大雨に遭った。近くにあった「窩棚」（畑の見張り小屋）に入って難を逃れたが、雷雨の中、二人は結ばれてしまい、二か月後、雷超は玉珍と結婚した。後に二人は偽装離婚して一人は町に、一人は農村にと別れて住むことになった・・・。

黄建国も于金霞と、秋の夜の雷雨の中、「窩棚」で過ちを犯した。また、建国も町に帰るために于金霞と偽装離婚を画策し

た。作者が先の報告集を参考にしたのでは、と思わせるほどだ。

ともあれ、困難な時期を自らの知恵と胆力で切り開いてきた黄建国が、初めて大きな挫折を味わうことになる。しかも建国が結婚をしたのは、自らの積極的な意思によるものではなく、于金霞の父親や屈強な農村の青年たちの、建国の返事次第では暴力も辞さない、という無言の圧力に屈したからである。

黄建国が于金霞と結婚することを承知した夜、「私」と建国は二人だけで丘の上に座るが、建国は何もしゃべらない。「私」が、僅かばかりの金を節約するために、とんだことになったなあ、と嘆息すると、建国は自分でもこのしくじりが大きいことは判っていると、嘆くのであった。

我深深地叹口气，说：“是啊，只指望坐火车不买票能省俩小钱儿，哪曾想还让你白捡了这么大的便宜！”

黄建国起身往回走，扔下话：“中了哥们儿，你别埋汰我了，我知道我这亏吃大啦！”
(p284)

こうして黄建国は于金霞と結婚し、生産隊が用意した小さな家に引っ越す。町に帰る望みも絶たれた。今まで自信満々で自らの才覚と胆力で生き抜いてきただけに、建国の挫折感は大かったはずだ。彼はもはや生産隊での労働は何かと理由をつけて忌避し、例の無賃乗車であちこち飛び回り、ブローカー商売で儲け始める。町に帰る望みを絶たれた建国は、代わりに金儲けに精を出したのである。「私」は同志でありメンターでもある黄建国のこのような状態に対し、深く同情しながらも見守ることしか出来ない。

知識青年たちは黄建国と于金霞の間に生まれてくる子供の名前を、早生のトウモロコシの品種名、「六月」にすればよいと

軽口をたたいていた。これは建国の子供が「出来ちゃった婚」の結果であることを揶揄した冗談であったのだが、建国は妻の反対を押し切り、本当に生まれた娘の名前を「六月」にしてしまった。自分たちが悪ふざけで口にした名前を、本当に建国が娘に付けたことを知って皆は当惑するが、建国はいい名前を付けてもらって感謝している、と笑う。が、その時「私」は建国が目に涙を浮かべているのを見逃さなかった。

皆にからかわれているのを知ったうえで、「六月」と名前を付けるという、黄建国のこの一種自虐的な行為に、彼がこの結婚で受けた打撃の大きさが判る。建国は「私」がその他の仲間と一緒に選抜されて町に帰るときも見送りに姿を見せなかった。自らが招いたとはいえ、身の不運をブローカー商売に熱中することで何とか紛らわせていた建国であるが、自分の弟分、弟子である「私」が町に帰ることに、再び挫折感を感じたのであろう。

「私」は黄建国の涙を目にし、町に帰る仲間を見送りにも来ない彼の心情を思いやる。「私」は師であり同志でもある建国の蹉跌に心を痛める、がしかし、どうすることも出来ない、ここでもただ見守るだけである。

4. 3 国家を欺く黄建国、新たな蹉跌の予感

黄建国は仲間が次々町に帰っていくのを見て苦しみ、于金霞と偽装離婚して町に帰ることも考えたが、結局不可能なことを知り、それからはますます金儲けに精を出す。「私」が彼を訪れたとき、彼は生産隊の批判大会で投機行為云々を糾弾されていた。しかし彼は形だけの自己批判でこれをやり過ごし、その後「私」を相手に、いまだに投機取引を問題にする連中を馬鹿にし、氣勢を上げる。作者は、これは1978年の冬の事であると記す。鄧小平が改革開放を提起したのはこの年12月の中共11届

三中全会である。いまだに東北地方は、「投機行為を取り締まろう！」として建国の「自由交易」を糾弾する。大いに遅れていると建国は悪態をつく。「私」は建国と一緒に笑いながら酒を飲む、「私」には真似はできない建国のバイタリティーを感じながら、挫折に打ち勝ち、再び輝いている建国を、「私」は好ましく眺めたであろう。

だが、この時の黄建国の心情は挫折から完全に吹っ切れたものであったろうか？建国は知恵もあり、胆力もある。世の中を思いのままに突き進む自信もある。しかしその彼は、自らの責任とはいえ下郷先でやむなく得た妻子のために、町に帰することも出来ずにいる。彼のヤミ商売での金儲けに対する執着は、自らの境遇に対する挫折感、絶望感を覆い隠すためのものだったのではないか？「私」には建国が完全に吹っ切れて再び頼もしい兄貴、師匠に戻ったように見えたかもしれないが、筆者は建国が胸の奥底に、まだ完全には癒されていない傷を抱えていたのではと思う。

その後「私」にも転機が訪れ、「私」は努力の末、労働者から新聞記者となる。そして「私」が30歳即ち1980年の五・一メーデーの時、黄建国に誘われて瀋陽に遊びに行く。そしてその帰り、その後の建国と「私」の運命を左右する出来事が起こる。

黄建国と「私」は瀋陽に遊んだ帰りの列車の中で、捨て子騒動に遭遇する。建国は、生まれて間もないその捨て子を引き取るという。後に判明するが、この捨て子というのは建国の実の息子であり、これを妻の于金霞が、建国と示し合わせて捨て子のように装い列車に遺棄、これを建国が善意の第三者のふりをして引き取るという、たいそう手の込んだ一芝居であったのだ。

この背景には、中国が1979年から、「独生子女政策」、一人っ子政策を始めたことがある。⁽⁹⁾既に娘を一人得ていた建国は、于金霞が妊娠し、超音波検査でそれが男の子だと判明した後、

一人っ子政策により出産が許されない于金霞をひそかに遠くの親戚の家にやり、そこで男の子を出産させた後、于金霞にその子を列車の中に遺棄させ、これを自ら引き取ったのである。相変わらずアッと驚くような建国の策略と役者ぶりである。「私」はいわば証人として、この列車内での芝居に付き合わされたのだ。このいきさつを知らなかった「私」は、建国の義侠心に感激し、彼を称賛する新聞記事を書き、その記事が話題になったりもした。

では、何故黄建国はこのような手の込んだ芝居を打ち、しかも「私」をこの芝居に付き合わせたのであろうか？一つには先述の「独生子女政策」があり、しかも建国はどうしても男の子が欲しいと願ったことがある。また、今や独力で幅広くブローカー商売を手掛けている建国は、国家を欺くことに何の罪悪感も感じず、むしろ下郷時の蹉跌のこともあり、国家を欺くことで快感を得たいと思ったのかもしれない。また、「私」をこの芝居に付き合わせた理由は、「私」が新聞記者で社会的信用もあり、人柄も真面目であることから、列車内で何かの時には自分の助けになるとの読みからであろう。事実、「私」がこの一件を記事にしたおかげで、建国は子供の引き取り手続きをスムーズに行えた。しかし、もう一つ、建国が「私」を列車に同行した理由がある。それは、「私」に対する建国の密かな優越感である。

改革開放政策の進展に伴い、黄建国はブローカー商売を順調に伸ばしている。今回の息子を捨て子に仕立てて、もらい受けるという策略も完璧だ。建国はこの完璧な姿を、弟分である「私」に見せたかったのだ。もちろん、「私」には計画について一切話をしない、自作自演の完璧な姿を、何も知らない弟分に見せて、密かな優越感に浸りたい、という隠微な感情が背景にある。挿隊の後、町に帰った優等生の弟分が、新聞記者になり、

社会的地位も得つつある。このような「私」を、建国は自らの演出に沿って思いのままに動かしたかったのだ。このような背景や建国の思いを「私」は何も知らない。「私」は純粹に建国が男気を出して可哀想な捨て子を引き取ったと思い、彼を称賛する記事を書いた。「私」にとって、やはり建国は親しい、そして誇りとする友人であり、師匠である。

しかしこのような二人の思いの間に、波瀾が生じる。自分の意のままに周りを動かし、国家を欺き、達成感、優越感に浸っていた黄建国に対して、「私」が列車での捨て子騒動で知り合った、若くて美人の列車長、単婕を結婚相手として紹介した時である。

「私」が建国を連れ出して乗車した列車内で勤務中の単婕を紹介したとき、彼は驚愕する。彼は内心の動揺を隠して、単婕にそつなく挨拶はする。しかし「私」と食堂車で酒を飲み始めると、彼は大いに酔って乱れてしまう。

“兄弟呀，要是把你媳妇比成树上的金丝猴，我家的那娘们儿整个儿就是荒山沟里的老野猪一个！”惹得身边的人不住地回头看，还有坏小子哈哈笑。（p301）

お前の嫁が木の上のキンシコウなら、俺の嫁は谷間のイノシシだ、と喚き、周りの悪ガキにも笑われる有様である。

黄建国は「私」が若くて美人で聡明な列車長の単婕と結婚することにショックを受けた。建国は、自分は「私」より金も稼いでいる、国家を欺いて子供も二人儲けた、弟分である「私」に対しても、密かに自らの優位性を見せつけた。順風満帆、と思っていたところに、自分が弟分と見なし密かに優越感も感じていた「私」が、ことも有ろうに、美人で優秀な女列車長を結婚相手として紹介してきた。しかも「私」がその彼女と知り合

うきっかけは、自分が企てた捨て子騒動にあったのだ。

建国は自らの妻于金霞に比べ、全ての面で優秀な単嬢が「私」の嫁になるというのを知り、改めて于金霞と結婚せざるを得なくなった時の敗北感を思い出し、新たに「私」や単嬢に対して劣等感を覚えたのだ。建国が于金霞と結婚せざるを得なくなった原因は建国自ら招いたことであったし、「私」が于金霞よりもはるかに優れた嫁を持つようになったきっかけも建国自らの企てが招いたことだった。すべて自らの責任だ。

酒を飲んで大いに乱れ、大声で喚く黄建国の胸中を、「私」はこの時点ではまだ知らない。

4. 4 黄建国の告白、立ちすくむ「私」

これ以降、黄建国は、ますますブローカー商売に熱中し、規模も拡大していく。「私」が、そろそろ堅実な実業に転身しては、と忠告しても建国は聞かない。そのうちに大連に若い女を囲い始める。偶然それを見知った「私」はショックを受ける。

「私」にとって、建国はよい兄貴である。新聞社の入社に際しては広告取りで助けてくれた信義に厚い人間だ。「私」は建国を諫めるべきか否か逡巡する。

「私」は建国の胸の内を知らないが、建国は「私」に美人で聡明な嫁が現れたことで、今まで抑え込んでいた劣等感と敗北感を再燃させてしまい、その思いを払拭するためにますます商売に熱中し、女も囲うようになったのだ。そして、何も知らなかった「私」は、建国の息子の家出について于金霞の相談に乗っているうちに、彼女から列車での捨て子引き取り事件の真相を聞き、大きなショックを受ける。建国が自分に本当の事を語ってくれなかった、自分を本当の兄弟分として見てくれていなかった、信頼されていなかった、との思いでショックを受けたのである。

このように見てみると、列車での捨て子引き取り事件と、その後の「私」と美人で聡明な単捷の結婚によって、黄建国と「私」の関係に変化が生じたことが判る。

片や過去の蹉跌を、金もうけに専心するという代償行為で心のバランスを取り、若干の優越感を感じながら、何くれと無く弟分を世話してきたが、その弟分の嫁取りで、今まで潜在していた挫折感、敗北感が顕在化し、更に新たな劣等感まで覚えるに至った黄建国と、此方、今まで、その能力を尊敬し、信頼もしてきた兄貴分が、根本のところでは自分を信頼してくれていなかった現実に関心が揺れ動く「私」である。

そして建国が息子の事で釈明に来た日、ついに建国が「私」に、決定的な告白をするのである。

建国は列車での捨て子事件について、「私」に秘密にしていたのは、犯罪行為にお前を巻き込むわけにはいかなかったからだ、と説明するが、「私」は、では何故自分を証人のような形で芝居に立ちあわせたのかと釈然としない思いに駆られ、その思いのままに、大連の囲い女について、建国を詰問する。そして女房、子供を大事にすべきだと説教する。

そしてこの時、建国の想いがほとぼしる。

可兄弟你咋就站着说话不腰疼？咱哥儿俩从小一块撒尿和泥，论脑子和腿脚也没差到哪里去，可到后来你娶的媳妇如花似玉知书达理，我娶进门的就非得是老母猪它二姨？要不是她娘家人提着锹镐逼成亲，我也不至于一辈子非咽下这口泥汤水吧？我一想起这些破烂事，就心灰意冷，啥念想也没有啦。人来世上，只走一遭，既没念想，那就别再亏了自己，趁着还没七老八十走不动爬不动，那就得乐且乐吧，可别临闭眼时回头想，一辈子啥也没落下，都亏了，那才大不值呀！”

(p308)

自分と「私」は同じように育ってきたのに、「私」の嫁は花のよう、玉のようで教養もあり道理をわきまえている、それに比べて俺の嫁は老いぼれブタ以外の何物でもない、あの時、あいつの家族が俺を脅かして結婚を迫らなければ、こんな羽目にはならなかったのに…。と建国は激白する。ただの一度の人生に、もはや願うことも無くなった、人生の最後に、損ばかりしていた、なんて述懐するのはご免だ、と。

国家をも欺く一芝居を鮮やかに成功させ、悦に入っていたかもしれない建国の前に、「私」が結婚するつもりだと紹介したのが、若くて美しく、有能な単嬢である。それを見た途端、建国は自分の妻の于金霞と引き比べてしまい、封印してきた過去の挫折感、敗北感そして劣等感まで自覚せざるを得なくなってしまうのだ。建国はついに、その胸の奥深くしまっていた挫折感、敗北感、劣等感をさらけ出してしまった。一方、「私」は建国のこのような挫折感、敗北感、劣等感を今まで知る由もなかったのでショックを受ける。「私」にとって、建国は師匠であり兄貴分であり、心を許した友人でもあった。その彼の自尊心を傷つけ、劣等感をも与えた原因が自分の嫁にあったのだ。

黄建国と「私」の間の友情に決定的な岐路が出来てしまったのは、建国が心情を吐露した、まさにこの時であった。

4. 5 去っていく黄建国、見送るしかない「私」

黄建国の告白の後、建国と「私」の付き合いは明らかに以前とは異なり、儀礼的、表面的なものになってしまう。建国が于金霞との結婚による蹉跌を未だに引きずっていること、そしてそれに加え「私」の嫁である単嬢と于金霞の比較から、「私」に対しても劣等感を抱いていることが明らかになったためだ。今まで尊敬していた兄貴分の建国が、未だに敗北感、挫折感にさいなまれ、かつ「私」の妻の存在が、更に深く建国を傷つけ

ていることを「私」も知ってしまった以上、二人はもはや腹を割って話をしたり、付き合ったりする関係では無くなってしまった。

そんな二人の最後の邂逅は、夜行列車のコンパートメントである。二人とも無賃乗車で、建国は偽造の鉄道査察官の身分証明書で乗車している。二人は意識的に踏み込んだ話はせず、当たり障りのない話を続ける。お互いに、もはや昔の関係には戻れないことを知っている。

我们以高挑的塑料瓶盖做杯子，他一杯，我一杯，没滋没味地喝，说些不咸不淡的话，两人都刻意地回避着一些话题并保持着一定的距离，就像铁路上行下行的两条线路，尽管让人看着贴得很近，但两列相向疾驰的列车擦身而过时，是绝不会有什么刮碰的。想到这一点，我心里生出很沉重的痛楚，昔日淘气包同在火车上蹭车板卖鸡蛋的少年，又在乡村的同一口大铁锅里搅过马勺的弟兄，彼此并没有因为切身利害发生过任何冲突，两颗心为什么就离得这么远了昵？（p311）

昔一緒に列車にただ乗りして卵を売っていた、農村で同じ釜の飯を食っていた、その二人の心が、上りと下りの線路を行く列車がすれ違う時、接するかに見えて決して交わらないのと同じように、通わなくなってしまった、どうして二人は、こんなに遠くに離れてしまったのかと「私」は思う。

もちろん「私」は知っている。建国の心の闇は、心ならずも于金霞と結婚したことに始まり、そして決定的なのは、「私」が于金霞とは比べ物にならない、才色兼備、とても優秀な妻を得たことにあると。しかも、「私」が妻を得たいきさつは、建国が筋書きを描き、主演し、「私」を端役に配した芝居の番外編の結果であり、建国自身が準備したのも同然なのだ。

コンパートメントで二人は、酒を飲み、興が乗ったふりをして、拳を打つ。「私」は、二人はどうしてこんな関係になってしまったのか、二人の間に何のわだかまりも無かった昔に帰れたら、どんなに良いだろうかと思いながら、興が乗ったふりをする。建国の心の動きは描写されていないが、彼も恐らくそうであろう、二人が「兄弟の契り」を交わした時、そしてその後も折に触れて二人で打ってきた拳遊びを、建国の方から持ち掛けた。ここに彼も「私」と同じように感じていたことが示される。

しかしこの、二人の最後の邂逅も、建国の持っていた証明書が偽造であることがばれ、彼が鉄道警察に連行されたことにより終焉を迎える。建国は連行される前、密かに「私」に荷物を託すが、それは実は麻薬であった。「私」はそれを知る由もない。

コンパートメントでの邂逅以降、建国と「私」は再び会うことは無かった。建国は労働教育所に送られたが、公安が彼を麻薬の件で逮捕しようとする前に、要領よくそこを退所して姿をくらます。「私」は彼との関係で、長い間公安に目をつけられていたのを知り驚く。更に列車で建国から預かった品物が、20人を死刑にするに足る量の麻薬であることを知った時、驚きを通り越して恐怖を覚え、改めて建国の事を恨めしく思う。

それにしても、どうして建国は麻薬まで扱うようになったのであろうか？中国での麻薬犯罪は、極刑に処されることは十分承知しているはずだ。にも拘らず、彼は麻薬を扱うようになった。その理由や彼の心理について、作者は描いていないし、「私」が建国の心境を推し計っている描写もない。しかし筆者は建国が麻薬にまで手を染めた理由は、恐らく次のようなものであろうと考える。

即ち、建国は「私」に自分の心の闇を吐露して以降、自分で

も挫折感や敗北感、劣等感を改めて自覚し、それらに対して必死に抗う過程で麻薬にまで手を染めるに至ったのであろうと。人生の半ばを迎えて、若い日の挫折感、敗北感、劣等感を再び実感させられ、しかもそれらを一番知られたくなかった長年の親友に激白してしまった。建国は再び顕在化させてしまったこれらの感情を、何とか封印しようと抗ったのだろう。その結果、ビジネスを次第にエスカレートさせていき、それを実行する過程で自らの能力を確認し、それによってかつての挫折感、敗北感、劣等感を覆い隠そうとしたのではないか。もはや建国にとって、行動の規範は法的に許される、許されないということではない、如何にして障害に打ち勝ち、そして自らの能力を認識できるか、にあったのだろう。自らの能力を確認することにより、自らの心の闇を再び封印できる、そう考えて必死に抗ううちに、麻薬を扱うという、行きつくところまで行ってしまったのではなかろうか？

我恨黄建国。如果说数年前知晓了他捡孩子的真相，我心生的是怨气，那这次就是恨，很恨，极恨！他万不该在落入警方之前，将足以致人于罹难的罪证转移藏匿到我手里。如果不是公安机关明察秋毫，我岂不是将长久地陷于难见尽头的巨大黑洞之中？

(p318)

「私」は、建国によって麻薬犯罪の片棒を担がされそうになったことを、大いに恨む。一つ間違えば私も巨大なブラックホールの中に落ち込んでしまうところであった、どうして建国は私をこんな目に合わせたのか？と。しかし「私」はやはり願う、どんな形でもいいから建国は命を長らえてほしいと。情状酌量をしてもらえるだけの手柄を立てて自首してくれと心から願う。やはり「私」は半生を共にした友人の事を、忘れることは出来

ないのだ。

但是，我仍真诚盼望我的这位昔日的朋友不致因获重罪命丧黄泉，哪怕被判个死缓。如此结局的前提眼下只有一个，黄建国赶快自首归案，并戴罪立功，争取法律的从宽处理。如果我能得知他的联系方式或在归案前见他一面，我一定在第一时间告诉他：自首，立功。
(pp318-319)

当時の社会の中で、若い時の蹉跌によって、「私」とは異なる進路を余儀なくされ、その後もその能力、存在が社会に認められなかった黄建国。彼は残された家族に十分な金を残して姿を消した。本質は誠実なのだ。「私」は今でも彼に友情を感じている。

以上、本章では、1960年から20世紀末に至る間の、時代と社会の変遷の中における黄建国と「私」の二人の姿を、二人の間に働いた感情や心理的移ろいとともに追った。この作業を通じて、筆者は作者の思いが次のようなものであると理解した。

即ち、作者は黄建国を通じて、能力、意欲のある人間が、20世紀後半から20世紀末に至る時代や社会の流れの中で、わずかな行き違いで、こと志と異なる道を歩むことを余儀なくされた悲劇を描き、またこれにより、出発点は同じであった友人同士が、その熱い友情にもかかわらず、全く正反対の道を歩むことになる皮肉な結果を、二人の間で交換される微妙な感情の動きとともに読者に示そうとしたのであろう、と。

この作品の初出は2008年1月である。即ち2008年北京オリンピックを迎える年である。当時、「中国は2008年のオリンピック招致と運営の成功を、全面的に国際社会に受け込み、全人類に貢献すると同時に中華民族の偉大な台頭を表出する、という極めて象徴性に満ちた『大事』と見なしていた」。⁽¹⁰⁾ このよう

な、中国社会にとって一種の節目となる時期に、孫春平は20世紀後半の大躍進期から文化大革命、改革開放を経て21世紀に至る、時代と社会の流れを読者にもう一度思い起こしてもらうこと、そしてその過程で発生したであろう、幾多の、個人では抗し得ない運命のいたずらに思いを馳せてもらうことを望んだのであろう。

物語の最後、「私」は家の近くの化学工場の引き込み線の線路上で、ビール瓶を抱えて座り込み、拳を打っている二人の少年を見る。

我看到两个十多岁的小男孩各抱着一瓶啤酒，面对面骑坐在钢轨上，正笨笨拙拙地划拳唱令，不由站在那里呆住了。

“哥俩好啊，三星照啊……五魁首啊，六六顺啊……”

一个妇女顺着铁道跑过来，远远地就喊就骂：“你个不着调的东西，屁大点儿就跟你爸学这个，你不怕火车开过来把你轧死呀……”

两个小男孩跳起身，飞逃而去，很快就没了踪影。而我则仍站在那里发呆，很久，很久……（p320）

かつての黄建国と「私」のような少年たちが、婦人に罵られて飛ぶように逃げ去った後、残るのは二本のレールのみである。

もう決して交わることは無い、でもどこまでも並んで一緒に走る二本のレールは、まるで人生の岐路で離れてしまった「私」と黄建国の人生、そして友情の象徴であろうか？

5 最後に

本稿で筆者は中国東北地方の満州族作家、孫春平の作品「一路划拳」について、ストーリーの展開と共に変化する黄建国と「私」の関係、及びそれに伴う二人の心理的移ろいの分析を通

じて、作者がこの作品に寄せた思い並びに問題提起について考察した。しかしながら今回は本作品のもう一つの特徴である、東北方言や歇後語、慣用句などを縦横に駆使した文章表現や、時代背景を特徴づけるエピソードの巧みな挿入、ストーリーの内容に合わせた映画、演劇の一場面との関連付け、などについては紙面の関係で触れることが出来なかった。次の機会にはこれらについても考察してみたい。

最後に、本稿を作成するにあたり、適切なご指導を賜りました、佛教大学文学部中国学科李冬木教授に深く感謝いたします。

(注)

- (1) 《一路划拳》 《小说月报原创版》 2008年1期

後に『孙春平中篇小说集 一路划拳』として出版される。

中国言实出版社 2016年1月 なお本論文は、この中国言实出版社版を底本とする。

- (2) 《二舅二舅你是谁》 《人民文学》 2010年2期

- (3) 孫春平の経歴については、以下の文献を参考とした。

3-1 杨利景『文学的演练』作家出版社 2011年11月 第1版
本書は「作家在线」(<http://www.haozuojia.com/>)にアップされている。今回はこの「作家在线」にアップされている内容を参考にした。

<http://www.haozuojia.com/zcms/book/serial/content?SiteID=21&ContentID=36506>
(2017/7/11)

3-2 孙春平『同一首歌』吉林出版集团有限责任公司 2010.4
203頁(「黑土蕴绿 活水生春」 韩春燕)

3-3 杨利景、孙春平「一个小说家与生活的亲密接触」,『当代作家评论』 2009年第3期

- (4) 前出(3)の3-3、杨利景と孙春平の対談

- (5) 孙春平『同一首歌』吉林出版集团有限责任公司 2010年5月、

229頁（創作年表（主要作品）） リスト

- (6) 藤井省三、『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会 2005年3月、119頁
- (7) 「百度百科」に「锦州市铁路高中」が紹介され、その中で著名な卒業生として、1966年度卒業生に孫春平が紹介されている。
<https://baike.baidu.com/item/%E9%94%A6%E5%B7%9E%E5%B8%82%E9%93%81%E8%B7%AF%E9%AB%98%E4%B8%AD/2883877> (2017/10/31)
- (8) 章徳宁、岳建一編『中国知青情恋報告－青春極地』光明日報出版社 北京1998年3月 1～37頁
- (9) 加藤千洋『岩波ブックレットNO.213中国の「一人っ子政策」－現状と将来－』岩波書店 1991年8月 8頁
- (10) 周星「北京オリンピック開会式と『イメージング・チャイナ』」『文明21』（愛知大学国際コミュニケーション学会）No. 29 p86（2012年12月）